

2) 乳児期早期における脳障害早期発見に関する研究

黒川 徹 (九大小児科)

馮 健 清

南部 由美子 (博多保健所)

引き起こし反射は背臥位の児の両手を引き、上体を起こすことによって、筋トーンと反射をみようとするものである。これは新生児乳児の運動機能の評価法として、1) 手技が簡単であり、聴診より短い時間でできる。2) 頸部、軀幹、上下肢とはほとんど全身の運動機能を判定できるという特色がある。本反射を乳児検診にとり入れるための標準化ができるか否か検討した。

〔対象〕 i) 0～7 生日の男 27 名、女 26 名、 ii) 3 ヶ月検診受診児のうち 80～119 日の男 125 名、女 114 名であった。

〔方法〕引き起こし反射を行ない、把握反射(なし、最初のみ、中途まで、最後まで握る)、肘関節(屈曲、やや屈曲、伸展)、肩関節の力(なし、弱い、中等度、強い)、頭のついてきかた(背屈、軀幹とやや平行、軀幹と平行)、下肢(伸展、屈曲外転、腹部へ挙上、半屈位起立、伸展起立)、頸痙(なし、反射的にあり、常時あり)について観察した。

〔結果〕表 1、表 2、表 3、

〔結論〕

1. 新生児では把握反射が中途までみられ、肘関節はやや屈曲し、頭は中途背屈しているが、坐位では反射的に頸痙がみられるものが多かった。
2. 3 ヶ月では把握反射は最初のみみられ肘関節はやや屈曲し、頭は中途やや平行または背屈しているもの、下肢は屈曲外転または挙上するもの、坐位での頸痙は反射的にあるいは常時みられるものが多かった。
3. 戻すときには引き起こすときに比し、肘関節を屈曲し、肩関節の力が強く、下肢を挙上させるものが増加していた。
4. 男女間に差はなかった。
5. 3 ヶ月児においては、肘関節が伸展し、肩関節の力が弱く、坐位で頸座が反射的にも認められないものは非典型所見として follow up が必要と思われた。

表1 引きおこし

	0～7日		3ヶ月児(80～119日)					
	正常	非典型	正 常			非 典 型		
	男+女	男+女	男	女	合計	男	女	合計
把握反射	49人		110人	97人	207人	15人	17人	32人
なし	3(6%)	1	3(3%)	2(2%)	5(2%)	1(7%)	1(6%)	2(6%)
最初のみ	25(51%)	2	72(65%)	58(60%)	130(63%)	13(86%)	15(88%)	28(88%)
中途まで	20(41%)		30(27%)	29(30%)	59(29%)	1(7%)	1(6%)	2(6%)
最後まで	1(2%)		5(4%)	8(8%)	13(6%)			
肘関節	49人		110人	97人	207人	15人	17人	32人
屈 曲	12(25%)		18(16%)	21(22%)	39(19%)	1(7%)		1(3%)
やゝ屈曲	31(63%)	1	84(77%)	67(69%)	151(73%)	6(40%)	6(35%)	12(37%)
伸 展	6(12%)	2	8(7%)	9(9%)	17(8%)	8(53%)	11(65%)	19(59%)
肩関節の力	50人		110人	97人	207人	15人	17人	32人
なし	3(6%)		4(4%)	2(2%)	6(3%)	1(7%)	1(6%)	2(6%)
弱い	12(24%)	3	20(18%)	23(24%)	43(21%)	9(60%)	11(65%)	20(63%)
中等度	30(60%)		60(54%)	58(60%)	118(57%)	4(26%)	4(23%)	8(25%)
強い	5(10%)	1	26(24%)	14(14%)	40(19%)	1(7%)	1(6%)	2(6%)
頭のついて来かた	50人		110人	97人	207人	15人	17人	32人
背 屈	38(76%)	3	42(38%)	39(40%)	81(39%)	15(100%)	14(82%)	29(91%)
軀幹とやゝ平行	8(16%)		47(43%)	36(37%)	83(40%)		3(18%)	3(9%)
軀幹と平行	4(8%)	1	21(19%)	22(23%)	43(21%)			
下 肢	21人		67人	58人	125人	8人	11人	19人
伸 展	1(5%)		2(3%)		2(2%)			
屈曲外転	19(90%)		30(45%)	27(47%)	57(46%)	7(88%)	7(64%)	14(74%)
上へ拳上	1(5%)		24(36%)	24(41%)	48(38%)	1(12%)	3(27%)	4(21%)
半屈位起立			9(13%)	6(10%)	15(12%)			
伸展起立			2(3%)	1(2%)	3(2%)		1(9%)	1(5%)
頭 座	50人		110人	97人	207人	14人	17人	31人
なし	14(28%)	3	12(11%)	10(10%)	22(11%)	9(64%)	8(47%)	17(55%)
反射的にあり	33(66%)		54(49%)	48(50%)	101(49%)	5(36%)	8(47%)	13(42%)
常時あり	3(6%)	1	44(40%)	39(40%)	83(40%)		1(6%)	1(3%)

表 2 戻 す と き

	0 ~ 7 日		3 ヶ月児 (80~119日)					
	正 常	非典型	正 常			非 典 型		
	男+女	男+女	男	女	合 計	男	女	合 計
把握反射	22人		69人	58人	127人	8人	11人	19人
なし	3(14%)		2(3%)		2(2%)	1(13%)	1(9%)	2(11%)
最初のみ	9(41%)		46(67%)	36(62%)	82(65%)	7(88%)	9(82%)	16(84%)
中途まで	10(45%)		19(28%)	21(36%)	40(31%)		1(9%)	1(5%)
最後まで			2(3%)	1(2%)	3(2%)			
肘関節	22人		71人	58人	129人	8人	11人	19人
屈 曲	2(9%)		19(27%)	22(38%)	41(32%)			
やゝ屈曲	16(73%)		48(68%)	34(59%)	82(64%)	4(50%)	4(36%)	8(42%)
伸 展	4(18%)		4(6%)	2(3%)	6(5%)	4(50%)	7(64%)	11(58%)
肩関節の力	22人		72人	58人	130人	8人	11人	19人
なし			1(1%)		1(1%)			
弱い	5(23%)		7(10%)	5(9%)	12(9%)	5(63%)	8(73%)	13(68%)
中等度	14(64%)		32(44%)	28(48%)	60(46%)	3(38%)	2(18%)	5(26%)
強い	3(13%)		32(44%)	25(43%)	57(44%)		1(9%)	1(5%)
頭のついて来かた	22人		71人	59人	130人	8人	11人	19人
背 屈	17(77%)		25(35%)	13(22%)	38(29%)	8(100%)	11(100%)	19(100%)
軀幹とやゝ平行	2(9%)		29(41%)	27(46%)	56(43%)			
軀幹と平行	3(14%)		17(24%)	19(32%)	36(28%)			
下 肢	21人		68人	58人	126人	8人	11人	19人
伸 展	2(10%)							
屈曲外転	19(90%)		32(47%)	23(40%)	55(44%)	7(88%)	6(55%)	13(68%)
上へ挙上			31(46%)	33(57%)	64(51%)	1(12%)	4(36%)	5(26%)
半屈位起立			4(6%)	1(2%)	5(4%)			
伸展起立			1(1%)	1(2%)	2(2%)		1(9%)	1(5%)
頸 座	22人		69人	58人	127人	8人	11人	19人
なし	7(32%)		6(9%)	2(3%)	8(6%)	5(63%)	4(36%)	9(47%)
反射的にあり	14(64%)		30(43%)	30(52%)	60(47%)	2(25%)	6(55%)	8(42%)
常時あり	1(4%)		33(48%)	26(45%)	59(46%)	1(12%)	1(9%)	2(11%)

表3 新生児・乳児期におけるひき起し反射と

1才以後における発達との関係

1才以後における 発達神経学的所見	正 常			境 界			異 常		
	正 常	境 界	異 常	正 常	境 界	異 常	正 常	境 界	異 常
乳児早期の引 き起し反射									
新生児	4						1		
1ヶ月	4						4		
2ヶ月	17	1					2		
3ヶ月	7						4		
4ヶ月	3		1	1					
5ヶ月	1								
6ヶ月									
7ヶ月	1						1		

3) 乳児の姿勢反射・反応の発達とその機序

逆懸垂位姿勢反応への月令・体位・

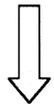
behavioral state ・視覚の影響について

北 原 信 (鳥取大学医学部脳神経小児科)

笠 木 重 人

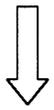
目 的

乳幼児の姿勢反射・反応の強弱は月令をはじめ種々の因子で変化する。乳幼児を逆懸垂位にした時では、乳幼児が示す頸部体幹の伸展の有無は月令、出発体位(腹臥位、背臥位)、behavioral state (泣く、泣かない)により異なることを昭和53年度の研究結果として報告した。今回は、各月令の被験児数を増やし、前年度の結果を追試すると共に、更に視覚が頸部体幹の伸展にいかなる影響を与えているかについて検討した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



引き起こし反射は背臥位の児の両手を引き、上体を起こすことによって、筋トーンと反射をみようとするものである。これは新生児乳児の運動機能の評価法として、1)手技が簡単であり、聴診より短い時間でできる。2)頸部、躯幹、上下肢とほとんど全身の運動機能を判定できるという特色がある。本反射を乳児検診にとり入れるための標準化ができるか否か検討した。